

# 市史通信

## 【目次】

- 横浜の洋装店と人びと
- 渡辺歌郎が見聞きした一九四五の鶴見
- 戦争体験の記録を引き継ぐ
- 所蔵資料紹介「FASHION in the 1946-1954」
- 市史資料室たより



ビジネス洋装店で「教子の微笑こそ我ケ微笑也」

則竹聡一郎氏所蔵

## 第48号

【発行日】2023年11月30日  
 【編集・発行】横浜市史資料室  
 〒220-0032  
 横浜市西区老松町1番地  
 横浜市中央図書館・地下1階  
 【電話】045-251-3260  
 【FAX】045-251-7321  
 【E-mail】  
 sisiryoyou@ml.city.yokohama.jp  
 【ホームページ】  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryoy/>

## 横浜の洋装店と人びと

## はじめに

横浜市史資料室では、初めての試みとして、シリーズ展示「横浜の女性と洋装」を開催している。期間中三回の展示会、「スマートな洋装」―横浜のモダンガール（二〇二三年一月一八日―三日）、「戦中・戦後の横浜の女性とファッション」―（二〇二四年一月二〇日―三十一日）に加え、市史資料室内展示「横浜の洋装風景」（二〇二三年一月一八日―二〇二四年三月三日）を企画した。

この展示会では、主に大正期から一九六〇（昭和三五）年頃までの、横浜市史資料室、横浜開港資料館などが所蔵する資料から、横浜の女性たちが洋装を取り入れていく姿を紹介する。

展示にあたっては、かつて横浜洋装連盟に加盟していた洋装店の方々や、現在神奈川県洋装組合連合会に加盟している方々にお話をうかがった。なかでも、馬車道に店を構える「ビジネス洋装店」の資料を借用し、展示している。そして、『市史通信』第四五号で紹介したボングレー洋装店の、最後の店主であった勝瀬さゆみ氏に、様々なお話をうかがう機会を得た。この稿では、ビジネス洋装店とボングレー洋装店に関わる人々について紹介したい。

### 大平哲生とビジネス洋装店

ビジネス洋装店を創業した大平哲生（本名・金之助）は、一九一三（大正二）年七月に三重県で生まれた。一九二七（昭和二）年七月に、一四歳で横浜市中区末広町一丁目の原田屋洋服店に入店し、一九三二（昭和七）年三月まで勤めた。一九三四（昭和九）年四月から一九三六（昭和一一）年五月までは、中区弁天通三丁目の山本洋装店に勤務した。この間、東京洋服学校を卒業している。そして、太平は一九三六（昭和一一）年七月に、中区上野町一丁目にビジネス洋装店を開店する。二三歳だった。一九四〇（昭和一五）年には、中区太田町五丁目の馬車道通りに移転した（写真1）。一九四二（昭和一七）年に応召（京都一六師団配属）し、一時休業する。その間、一九四五（昭和二〇）年五月の横浜大空襲で店は焼失。戦後、一九四六（昭和二一）年一〇月、三三歳の時に中区末広町で店を再開した。

その後、一九五六（昭和三一）年一〇月に中区太田町五丁目に本店を移転、

写真1 ビネス洋装店  
則竹聡一郎氏所蔵

一九六〇（昭和三五）年に、中区住吉町五丁目に移転した。大平の逝去（一九九四年）後、二〇一〇（平成二二）年に則竹氏により、店は太田町五丁目に戻り、現在に至る。

### ビネス洋装店資料

則竹氏から借用した資料は、一九三四（昭和九）年から二〇一七（平成二九）年までの、大平哲生とその家族、ビネス洋装店と従業員、大平が所属した日本デザインクラブや横浜洋装連盟、馬車道通サービス会などに関する五六件である。なかには、写真や新聞記事などを大平がまとめたスクラップ・ブック四冊、日記二冊（一九五九年・一九六〇年）、アルバム四冊を含む写真類、注文伝票や新聞紙で作った洋服の型紙、タグなど店に関する資料があった。この稿では、写真資料を中心に紹介したい。

### 従業員たち

大平は開業するまでに市内の洋服店で修業し、さらに学校に通って技術を身につけていたが、自身の店には住み込みの見習を置いて指導していた。表紙の写真には、下に「教子の微笑こそ我々微笑也」と書かれており、見習たちが楽しそうに作業している様子が見られる。

研修が終了すると、記念に従業員が全員で写真を撮っている。写真2は、一九五〇（昭和二五）年一月一五日に瀬戸智恵子の修業記念に撮られたもので



写真2 修業記念写真 1950（昭和25）年 則竹聡一郎氏所蔵

ある。前列右から三人目が大平である。正月ということもあるが、和服姿の女性が見られる。次の年からは、全員が洋服に変わる。一九五二（昭和二七）年の写真から、記念品が写っている。写真3は、一九五五（昭和三〇）年の石田弘子の修業記念のものであるが、左上のし紙を巻いた記念品の鏡台が見られる。修業式については、一九五九（昭和三四）年の大平の「日記」に記載がある。二月二二日に見習二名の修業式を行なったこと。修業生には、記念品として三面鏡と、赤飯一折、紅白饅頭を贈り、店の全員で記念写真を撮り、紅白饅頭と寿司をふるまったことが記されている。

翌年の「日記」からは、一五歳の見



写真3 修業記念写真 1955（昭和30）年 則竹聡一郎氏所蔵

習が入店したことがわかる。また、注文服の生地裁断技術を持つものが大平と数名しかおらず、従業員が不足して多忙であったこと。そこで、求人依頼するために会津若松の知人のもとを訪ねて、その結果経験者二名が入店したことなどが書かれている。

従業員たちは、日曜日に交代で休み、夏休みも交代で取ったようである。また、慰安として、箱根旅行やクリスマス会も行なっていた。正月には住み込み三人に「仕着せ」を贈っている。それぞれ、黒舶来モヘアオーバー、茶斜綾ツキードトッパー、単（ねずみ）ウールオーバークラウ

スと洋装店らしいものであった。

### シスター洋装店

ボングー洋装店に関しては、『市史通信』第四五号で紹介しているが、その後判明したことを加えながら、勝瀬さゆみ氏からうかがったことを述べる。

シスター洋装店は、『横浜貿易新報』一九三九（昭和一四）年四月八日付二面に、シスター洋裁女学院として紹介されている。ボングー洋装店をはじめた澁谷英行の父久吉は、バンクーパー（カナダ）で十数年洋裁の修業をしたのち、家族とともに帰国。すぐに震災にあったが、横浜に洋裁研究所を開設した。その後、野澤屋婦人服部に一〇年勤務して、一九三四（昭和九）年に退職。そして、シスター洋裁女学院を開校し、専門家として活用できる技術を生徒に身につけさせたという。

久吉は、バンクーパーで生糸貿易に携わっていたと聞いていたが、そのかわら洋裁技術を習得していたようだ。中山昶四郎編『加奈陀同胞発展大鑑 附録』（一九二二年）『カナダ移民史資料』



写真4 シスター洋装店店頭で 横浜市史資料室所蔵 ボングー洋装店資料





写真5 ボンゲー洋装店店頭にて  
横浜市史資料室所蔵  
ボンゲー洋装店資料

不二出版、一九九五年所収)には、バンクーバーの洋服店二軒、婦人・子供着仕立所八軒が紹介されている。修業する店は複数あった。また、久吉は同書「在留同胞総覧」に、横浜市西戸部町の住所で掲載されている。

シスター洋装店は、一九三五(昭和一〇)年現在『横浜商工案内』(横浜産業課、一九三七年)に、中区本牧町三丁目に久吉の妻さを「営業主又ハ代表者」として掲載されている。その後、『横浜市商工要覧 昭和十六年度』(横浜市経済部、一九四二年)には中区尾上町四丁目に久吉を「業者者又ハ代表者」として掲載されており、この間、店が本牧町から尾上町に移転していることがわかる(写真4)。

### ボンゲー洋装店

澁谷英行は、一九一六(大正五)年にバンクーバーで生まれ、七歳の時に日本にきた。一九三五(昭和一〇)年に父の店で働くようになり、洋裁の技術を身につけた。勝瀬氏によると、新井直三郎や伊東茂平にも教示を受けたという。新井は一九三五(昭和一〇)年



写真6 ボンゲー洋装店の人びと

勝瀬さゆみ氏所蔵



写真7 仮縫いの様子

勝瀬さゆみ氏所蔵

には、尾上町三丁目マローゼ洋装店を開いていた。澁谷はそのウインドウの飾を見てセンスを磨いたという。伊東茂平は、洋裁学校を設立するなど、著名な服飾デザイナーであった。

澁谷は戦時中、四年にわたり徴用された。その間、横浜大空襲で店を失った。シスター洋装店は、一九四六(昭和二一)年に、中区本牧二丁目で再開された。そして、澁谷は一九四九(昭和二四)年に、中区本郷町でボンゲー洋装店として独立した(写真5)。

### 三六番目の生徒兼お針子

勝瀬氏は、一九三六(昭和一一)年一二月に横浜で生まれた。本町小学校に通うが、戦時中七歳で伊豆に疎開し、

疎開先で中学校を卒業した。姉のたまえとは一八歳違いであった。澁谷と姉はシスター洋装店で知り合い、結婚した。勝瀬氏は姉が長男を出産する際に頼まれて、一六歳の時に伊豆から横浜に戻り、住み込みで手伝いを始めた。そして、二年目からは、三六番目の生徒兼お針子として、ボンゲー洋装店で働くようになった。澁谷は生徒たちに人気があり、ボンゲー洋装店にはシスター洋装店から移って来た生徒が大勢いた。写真6は、澁谷夫妻(前列左から三人目が澁谷、同二人目がたまえ)を囲むそれらの生徒たちである。独立してすぐの頃だと思われる。ほとんどの生徒が、比較的裕福な家庭の子女で高等女学校を卒業しており、和裁と同様に、洋裁

は花嫁修業の一つだった。

他方、勝瀬氏と同様に、中学校卒業後すぐに、生計をたてるために入店する女性も何人かいた。生徒一人に先輩が一人ずつ付いて指導したので、修業の進み具合は、その先輩次第だったという。澁谷からは厳しく指導

され、仕事中に話をすると怒られた。修業式などではなく、それぞれ一五、六年は勤めたのではないかとということだった。年に一度は、神奈川県洋装店の集まりで、箱根や千葉など近郊に旅行をすることもあった。

写真7は、ドレスの仮縫いの様子である。手前の女性は姉のたまえ、ドレスを着たモデルの左に澁谷、その左に立っているのが勝瀬氏である。一九五六(昭和三一)年NDC(日本デザイナークラブ)秋冬ショーの出品作品で、真紅の絹オーガンジーのイブニングドレス。第二回ミス・ユニバース世界大会第三位で、当時人気であった伊東絹子である。細かいひだのあるスカートは、扱いに苦労したという。

### おわりに

大平哲生も澁谷英行も、従業員には厳しくもするが、レクリエーションの旅行をしたり、集まりをもったりと気遣いをしていることがうかがわれた。

資料の使用をお許しいただきました則竹聡一郎様、ご協力たまわりました勝瀬さゆみ様、澁谷吉彦様、ご教示をいただいた武田周一郎様、多根雄一様に感謝いたします。

(上田 由美)

# 渡辺歌郎が見聞きした 一九四五年の鶴見

渡辺歌郎は明治後期から鶴見で開業していた医者である(図1参照)。歌郎が書き残した「感要漫録」は関東大震災時の記載が注目されている。この「感要漫録」及び歌郎については後掲の参考文献に詳しい。

ここでは「漫録」の原本が残っている二点、第二次世界大戦前後が記載されている第六号・第七号から、鶴見駅周辺の焼跡・ヤミ市等についての記載を紹介する(昭和十七年一月起 感要漫録 第六号)手島温子家資料二、「昭和二十年八月起 感要漫録 第七号 於疎開地高部屋」手島家資料五)。

## 第二次世界大戦中の歌郎

歌郎は一八六八(明治元)年四月一日茨城県生まれ、太平洋戦争開戦の四一(昭和一六)年には七四歳(数え年齢)となっていた。

歌郎は、空襲が現実的となってきた四四(昭和一九)年には「鶴見区は特に会社工場地帯故、「空襲の標的に」最先



写真1 渡辺歌郎 1942年  
手島温子家資料12所収

き選ばれるべく、何れにしても鶴見は免れ得ざるべき地域」と考え、その場合は「走る急ぐなどが余の最も苦痛とする処」で「どうしようか等絶へず心配の集点」となっていた。既に診療を養嫡子の四郎治に任せていた歌郎は疎開する事を決意し、同年一月九日、女中の絹と共に中郡高部屋村(現・伊勢原市)の家田家に疎開する。この高部屋村は絹の出身地であった。

## 五月二九日の空襲被害

歌郎が危惧したように、鶴見は一九四五(昭和二〇)年四月一五日に東京西部・川崎市などとともに空襲を受けた。この時は自宅・医院の被害は無かった。しかし、五月二九日の横浜大空襲ではガレージを残し焼失している。

歌郎は、二九日には「相模湾より進入して平塚方面に向つて当高部屋村上空を通過して一様に飛び行くのを見るに就け、横浜方面へ同一針路を辿り行くを見て正に横浜が目標だと察せられた」とあり横浜への空襲を予想していた。しかし情報が無く、翌三〇日も「交通網は破壊せられたため往くもならず来るも得ずして其真相を知るに由なく、唯横浜が全滅せりとの噂瀕々と聞く許り」との状況であった。

漸く三一日の午後になって、絹の「鉄道の」弟によって情報もたらされた。これにより医院等が焼失したこと、家族は「裸一貫」で佐久間家に避難していることが判明した。また関係先の「東亜」

がある本牧は「全滅との噂」で、横浜の被害は甚大でほぼ全滅と伝えられた。その他「東神奈川駅にて駅長を初め駅員等の屍体累々たるを目撃」との話しもあった。

六月四日には二女で四郎治の妻歌子が来訪した(昭和十六年一月起 家政乃記憶)手島家資料三)。これにより鶴見の罹災状況が細かく判明し「感要漫録」第六号に記載している。

これによると、下町の山側は「前の長寿庵」から生麦方面が「中西新宅前の家具店」まで焼失し(図1参照)、海側は「美好野」より南方面、渡辺医院・「田丸屋」・「備中屋」・「床金」までが焼失、建物疎開となっていた隣の「木曾家」

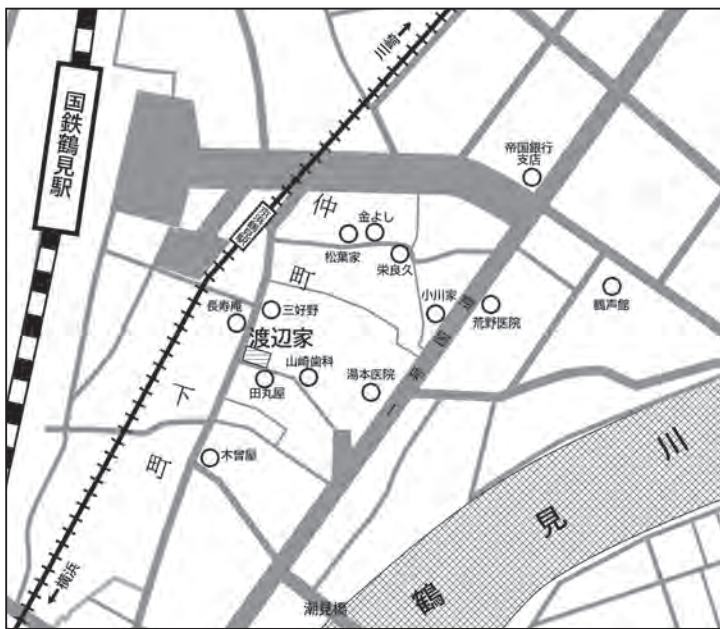


図1 鶴見の関係先略図

注:『横浜市商工案内』昭和六年などにより判明するものを示した。漢字等が異なる場合、妥当と思われるケースのみを掲載した。元図「仮製五千分一地形図第十二号 鶴見」(横浜市各課文書、『五千分一横浜地形図』横浜市役所、1953年)。このため1945年当時とは異なっている。

で止まり、また病室や貸家(川口・谷田)・「山崎歯科」・「鳥居」・「つるや」・「湯本」・「徳田」など国道まで「一軒残らず能くも焼き尽し」、仲町では朝日新聞と隣のすし屋は残ったものの、「花柳界の横町」は「見番」・「松葉家」・元の「栄良久」・「さつき」・元の「金よし」など国道まで焼失し、右側では「利の家」・元の「中川宅」・「国たけ歯科医」などが焼失した。また「小川家」と「徳田」の病室までは四月一五日の空襲で焼失していたが、残った住宅も全焼し、細い道路の反対側は「芸妓家一廊」・「現在は池谷庫吉の所有」・「今は接骨家の佐藤さん」の住宅・「鶴の湯」まで悉く焼失していた。国道の向こう側も「同様の惨状」で「荒野医院」をはじめ「汐見橋通り迄全部川淵迄一軒残らず焼き払つて川迄全通」し、「割烹鶴声館」は直撃を受けて「一瞬にして灰燼」となり、鶴見の花柳界は見番・料理店・待合・芸妓家は全滅となつ



たと述べている。その他、鶴見区全体で四月一五日の空襲では医院等二六軒が焼失し、五月二九日には渡辺・湯本・荒野の三軒、計二九軒の医院等が焼失し、産婦人科の桐村医院と汐見橋際の本山病院が残ったのみで「何んと惨憺たる者たらずや」と記す。このように横浜大空襲による被害の様子を記載している。

しかし歌郎は先述のように空襲必至とみて自身の疎開以外でも準備をしていた。既に前年には「晴着類」・歌子等所有品の「主なる家具」を高部屋村の堀江家（絹の実家）に疎開し、また歌郎が疎開するときにも「主なる家財」を持って疎開していた。その後、「鶴見の戦災も愈々必至の状態」となったので、残った家具のうちから選んで「西寺尾の堀江家」に預け、その他のうち「良品の瀬戸物類及塗物類等目ぼしい物」を内庭に埋めている。このため「家は美事に焼けたが家財は其割に先つ少ない方」とある。

一方で医療機器は全部、薬品類は大部分を焼失し、診療室の調度品などを「相当に焼きました」と記している。また、昭和初期に増築した新館と同時に「新改造」した風呂が自慢の普請だったが、それを焼失したことは「想へばあたら口惜しい感」と述べている。

歌郎は空襲被害を実際に確認したいと思っていたが、当時「乗物は何れも皆殺人的混雑にて老人には逆も乗車不能」で「甚だ危険」との噂で延び延び

になっていた。その後、歌子等の八戸行きが近日中となったので、満期となる金港無尽の一口と三菱銀行の定期の受領、健保の診療費の振替と愛国貯金がある医師の信用組合へ引き出しを兼ねて鶴見行きを決意し、絹の伯父の幹旋により品川まで牛乳を運ぶ自動車に同乗させてもらうこととなった。先ず桜木町の医師会館にある信用組合に行き、愛国貯金の全額と振替の一部を受け取り、それから鶴見に向かった。焼跡の車庫に住む清蔵宅で休み、金港無尽と三菱銀行に遣いにやり、金港無尽は移転をしていたため「要領を得ず」、三菱では元利金を受け取って品川から戻ってきた自動車に乗って帰宅した。

#### 「嗚呼悔しき八月十五日」

四五年八月、ポツダム宣言受諾により戦争が終結した。後に戦時の「指導者」に対し激しい憤りを記している。これについては「嗚呼悔しき八月十五日」との長文や、後述の鶴見行きを書いた文章の前段等でも述べられている。

歌郎は「吾等国民は指導者連の甘言に欺かれ戦は必ず勝つ焦せるな慌てるなどの言辞を信じ」、「悲惨の極に追い込まれながら、最後の勝利は必ず吾れにありとの虚報を信じ誰一人として戦争を忌避する者なく是も又国の為めと呪ふ者なりしは最後の勝利を掴まんが為めの魂魄堪へ難き困苦にも耐へ忍び難き悲惨をも能く之れを忍びしなり」と記している。

一方ではアメリカ軍が沖繩に上陸、基地を造成し航空機が本土へ空襲のために飛来するようになる。「そも日本艦隊は何処にありや果たして健在なり哉否やを叫ぶ」などの感想もあった。しかし東京新聞に掲載された予備役海軍中将の「沖繩作戦縦横談」を読み、沖繩に上陸したアメリカ軍は、補給・増強のために機動部隊を沖繩に集中させることから、逃げられないように時期を見て叩く、即ち「釘付けにした訳是れが即ち／日本の思う壺」との内容に、「余も又之れを読むと同時に余りにも嬉しい談話なるに再三再四繰り返して耽読し」、「嬉しさの余り」に全文を書き写したと述べている。

この他、収監後の東条英機の自殺未遂に対する批判や軍と財閥の結びつきによる軍閥内閣・軍国主義への批判も記す。結局は「吾等が期待せし『アッ』と言ふ秘策戦術は遂に拳がらずに『アッ』と反対に叫むだのは何と八月十五日の無条件降伏」で、それも天皇のラジオ放送となり、「『アッ』と言って国民皆一様に自失茫然と胸塞が」ったと記している（「辛き世の歎き」）。

このように終戦を迎えたが、高部屋村における生活はこの後も続いていく。

#### 自宅跡にて ― 鶴見行き① ―

一九四五（昭和二〇）年秋頃、歌郎は「一回鶴見へ往かなければならぬ用件」があり鶴見行きを考えていたが延び延びになっていた。これは、米などの物

資が不足し、特に農産物の不足から村々へ多くの人々が流れ込み、これらの「買出部隊」により小田急電車は超満員で毎回三〇四〇人から一〇〇〇人ぐらいは乗り切れない「殺人的混雑」であり、空襲直後と同様に「老体は実際冒険的」となるからであった。

しかし、帝国銀行と興信銀行の定期預金が満期となるので処理する必要があり、同時に行えば一回で済むことから一月二日に鶴見に行くこととした。

当日、絹を連れて出掛けた歌郎は先ず子安に赴いている。この道中の鉄道等のことは何も書かれていない。子安には、被災した興信銀行鶴見支店が子安支店に臨時窓口を置いていた。ここで定期預金証書の書換を行い、直ぐに鶴見に向かった。

鶴見では先ず自宅の焼跡に行き、門柱の傍に筵を敷き、持参した握り飯の弁当を広げて昼食を取った。その後、絹を帝国銀行へ証書書換のために遣いに出した。差し当たったの金銭の用途がないので、両行とも定期預金の更新を行い、利子を受け取る予定であった。

この間、歌郎は筵の上に座って往來を眺めていた。そこへ一人の男性が庭に入ってきて、「此靴売るんですか」と脱いでいた靴を指さして尋ねたという。歌郎は驚いて「イ、エ売りません」と断り、「馬鹿な奴だ、余を闇屋と勘違いしておるわい」と憤慨しているうちに、靴を提げた洋服の男性が「此靴売物ですか」と来て「二度吃驚」して慌てて



写真2 鶴見地域の空中写真 1947年7月

注：国土地理院地図・空中写真閲覧サービスより。  
USA-M371-143（アメリカ軍撮影）をトリミングした。

靴を隠したという。「斯くも物資の欠乏に喘へぐかとそゝる哀れの感にうたれ」とと感想を述べている。

そのうちに六〇歳ぐらいの和服の男性が来て「何か売るんですか」と訊くので、「いゝ、や何も売っては居ません」と「少し傲然として」断ると、後ろを指さして「どうでしょうそれを少し売って呉れませんか」と尋ねてきた。後ろを見ると夕飯にと持参した握り飯のお重がずれて中が見えていたという。夕食だからと断ったが、男性は未練がましく「何とかありませんかなー」と言い、歌郎は哀れに感じて「そんなに握飯がほしいのですか」と二個を与えている。男性は、嬉しそうに「代金は」と訊いたので、「売りはしません、余りにもあなた握飯がほしそうですからあげたのです代金は要りません」と応えると、

男性は筵に膝をついて「此御恩は必ず忘れせん何時か又必ず御恩を返せる時も来ましよう、こちらは渡辺先生のお宅で前より知っております、私は潮田の者です、どうもありがたうございました」と帰ったという。

歌郎は、村落に居住する自分は大きな苦労もせず、去年の十一月頃に配給米の不足分として闇米を買ったのみで「少しも餓を感じしことなく粗食ながらも何時も満腹」であったことと比べて、鶴見における食糧難は噂では聞いて誇大な虚報と思っていたが、「今現在に見た状況として一個の男子が僅か二個の握飯に筵に手を突き泣いて三拝此御恩はと迄感謝せしむるは余の想像せしより、尚深刻さを証明する者にして、是迄聞きし悲報も皆『デマ』許りでなく、愈々日本も敗戦国と没落し国民は悲惨のどん底に追い込まれ、将来いかになり行くか、想へば前途は心細き極みなり」との感想を記している。そうしているうちに絹が帰ってきたので、自宅跡を立って豊岡薬局で少々薬品を買って帰るために駅に向かった。

### 鶴見駅前露店 — 鶴見行き② —

国鉄鶴見駅前（東口側）は、「丸通」などの辺りは建物疎開で「広漠たる野原」で、そこに接して仮小屋が作られており、「鶴見露店商組合」の鑑札を並べた店が食料品以外の日用品を販売していた。

歌郎は「ハハー是れが蔭ながら話しの『マーケット』だな」と思いながら見てみると、店頭から後ろの野原も黒山のような人だかりであったという。その一端に「しるこや」があり「相当の家庭らしい奥さん」が肩を並べて食べていたという。しるこを覗いてみると「餅は餅でも底迄すき通る様な薄い餅」で「中身は寒天様な物が二ツ三ツ」しかなく、店も囲いが無く椅子も無く「青空野天でしるこの立ち食い」で価格は一杯一円であったという。歌郎は「皆恥も外聞も顧みず相当家庭の奥さんがしかも真つ昼間に野天でしるこの立ち食い、其心情を思ひ遣れば今や国民の餓へた姿にそゝる哀れを感じず」との感慨を記している。

この時にしるこを配る女性と目が合うと、「あら先生、渡辺先生にうまい処を見られて仕舞ったわ」と言われ、よく見ると既知の鶴見の芸妓「島吉」で、他にも二、三人がそこで働いているようだったという。「一極御馳走しますからとでも言われては大変、彼の野天での立食は」と這々の体で立ち去っている。

鶴見駅東口側（鶴見駅前地区）は、その後、復興土地区画整理地域に指定されが（一九四八年施行地区告示）、四九（昭和二四）年「再検討に関する基本方針」により再検討された結果、岡野・東神奈川地区とともに除外となった。この一因には立ち退かない露店の問題があった（『横浜市史資料室報告書 令和三年度』二頁）。

### 鶴見駅西口 — 鶴見行き③ —

次に、歌郎は、駅構内を横断して豊岡薬局がある西口に向かった。西口側も「広野原」でマーケットがあり、東口よりも店が多く「人たかりは正に数倍の雑踏」であった。絹を薬局へ遣いに出し、その間「マーケット」見聞と洒落込み限なく見えて廻っている。

商品は東口と同様に食料品は無く、「皆同じ様な封筒、鉛筆、毛筆、及ノート、草履、下駄」などで値段は高いが粗悪品ばかりで「手に取って見る気になれない物許り」、しかし、何処の店も「皆黒山の様な人たかり」でよく売れていると記している。

これらのマーケットの店の後ろに広がる空地には、これにも増して「一人の雑踏振り」で、覗いてみると「皆闇屋の城郭」となっており、露店商組合の鑑札を持たず警察の眼を避けて販売するヤミ屋であったという。ヤミ屋は店を持たず歩きながら購入者を漁っており、大部分がリングを販売していたという。

ヤミ屋はリングを風呂敷や買い物袋で持ち歩き、耳元で「林檎を買いませんか」と購入者を捜し、買うそぶりを見せると、その場で「直ぐ膝の上で販売台となって」販売したという。そこへ群衆が集まって「一塊」となったところがいくつも見られたという。歌郎が見たヤミ屋は四〇歳ぐらいの女性で、小粒三個が一〇円、大粒が同じく一〇



円で二個、「実に面白い様な売れゆき」と記している。そして風呂敷のリングが無くなると、ふところや袂から「まるで手品師の様」に取り出したという。

また、特に大勢がいる所を覗いてみると、「赤児を背負った三十位」のヤミ屋が「諸方をきよろ／＼しながら背負い袷天」から「セロ半紙」で包んだ握り飯二個を取り出した。それを洋服の男性が、十円札を投げ出して取って去って行ったという。この「洋服の男」が握り飯をどうするのか、なぜか興味があつたらしく詳しく記載し、持って帰って家族に食べさせるには少量と「余けいな心配」をしていたところ、群集の噂には、「末吉の者で已に潮田の会社おる内にお腹が減ってはれから末吉の先端迄帰るには空腹に堪へられず、中途の池の下あたりで休みながら食べるのだ」とあり「合点」している。

その後もヤミ屋は「相変わらずきよろ／＼と諸方を見廻し絶えずビク／＼の態度」であつたという。恐らくこれも群集の噂と思われるが、夫が同様に握り飯をこの場所で商っていたが、数日前に鶴見署に連れて行かれて未だ拘留中で、女性は「生き金が為め又食はんが為め冒険的の脱法行為」なので「一入の警戒」、「常に戦々恟々たる態度も読めて無理からぬこと、あー可哀相に攻めてあのむすびの売り終る迄見つからぬ様にと心秘かに祈りつゝ、」冷やか

しは終わりとしている。

その時に絹が戻ってきたので帰路に

つき、鶴見駅西口から東神奈川、それから伊勢原に向かい、午後六時に到着した。伊勢原では予め依頼していた絹の弟がリヤカーを持って迎えに来ており、それに乗って家に午後七時半頃にたどり着き「あー相当草臥れた」と夫れに書くのも相当草臥れた」との感想を記している。

### その後の歌郎

翌一九四六（昭和二一）五月の記載では、失業者増加や引揚者等により食糧難・住宅難がより大変になっていることを記し、この状況下で行われた新円切替・預金封鎖について自己を含めての影響について記している。

歌郎は、戦争中の生活については、高部屋村で「毎日暢気に偶に患者が来ても成る丈は是れを断つて、友来りて碁を囲み等して暮」していたと述べ、空襲で鶴見の家宅が全焼したが「怖い目に逢はず」、特に代診を以前に依頼していた医者家族五人が亡くなった「恐ろしかった話」を聞いて、「余は居らないでよかつた」「幸運を喜び」との感慨を述べている。戦後、四五年一月には「はや満一年是れ迄は先づ先きの予算通りに且つ食糧も聞く噂の如き惨じれも嘗なめずに粗食ながら何時もどうやら満腹も出来、暢気に友を迎へ囲碁等に耽けりおりました」と生活は順調であつた。ところが財産税と新円切替による預金封鎖により一変した。特に新円一〇〇

記す。空襲で家賃収入が無くなり、株の配当や預貯金の元利など「是れから余は一銭の収入もなくなり」、これで「世帯主が百円、世帯員が百円」では、女中の給料・煙草・新聞代ぐらいで消えてしまふと嘆いている。

一方で収入策は講じており、四五年一〇月には「内科産婦人科一般相談所」の看板を掲げ「一旦捨てた医業」を復活させた。この相談所は高部屋出身の絹の「大宣伝」などにより患者が付き、薬品の昂騰で医療費が高く設定できるので少数の患者で事足りると記す。また、鶴見からも薬品や生活費を届けてくれるので「餓死戦線もどうやら突破出来そうな見透し」と記している。

また高部屋村に入り込む人々の変化についても記しており、新円切替前は「買出部隊」により小田急が乗り切れない程の「殺人的な混乱」であつたが、新円切替により「パツタリ」と影をひそめ、「電車も悠々乗車できるようになつた」という。しかし、次第に入り込む人々が増加し、歌郎は「買出部隊」がまた来るようになったと思つたが、実際は食用の野草を採取に来る人々だつたと記している。

四六年には、これまで寄寓してきた家の都合により移転が必要になつてきていた。これには相談所に通つてきている患者等が心配してくれたが、なかなか決まらず、この経緯を書いていた一〇月二四日が雨で嵐になりそうなる天候も相俟つて「余として初めて嘗めた

陰鬱な気分、泌々と厭になりました」と記している。

その後、「万策尽きた結果で背に腹は換へられず」、「一時的の手段、是れより徐に良い時を捜」すまでの仮宅を決めている。「未竣工の家で四隣皆畠と栗の木許り、ましてまた囲いもなければ隣りはなし、ほんの野中の一軒屋でまだ一本の植木もなしで見るといふせきほんの陋屋、一見まさか余がこんなほろ家にと想わるゝならん」との家であつた。しかし、遮るものが無く、大山を見渡せる風景などにより「清き神風を総身に浴びて炎熱の暑さ忘るゝ涼風に碁を囲むの爽快は天の恵みの楽天地、是れこそ都会に住む士には、断して得られぬ涼快感、是れも此家の一得で予期せざるの収穫」と記している。

このように新たな生活を始めた歌郎であつたが、一九四七（昭和二二）年二月一八日に急逝した（『神奈川新聞』同年二月二六日・二七日）。享年八〇であつた。

### 【参考文献】

吉田律人「横浜現代史人物伝①鶴見の医師・渡辺歌郎」（『市史通信』一〇）二〇一一年三月、今井清一「横浜の関東大震災」（有隣堂）二〇〇七年、『横浜市医師会史』（横浜市医師会）一九四一年、『鶴見町誌』（鶴見町誌刊行会）一九二五年、『横浜市商工案内』昭和八年版・昭和一二年版、『横浜市土地宝典 鶴見区之部』一九三二年。

（百瀬 敏夫）

## 戦争体験の記録を引き継ぐ

戦争や空襲の体験記・手記の継承が、現在重要となってきた。戦争体験者の証言を直接聞くことが困難になりつつあるからである。体験を継承していくには、本人が生きた時代や地域、そして家族の歩み等についてもできるだけ理解する必要がある。体験を歴史の中に位置づけるため、日常の暮らしの記録や記憶も重要になってくる。

実は、体験記・手記では、特定の体験の記録だけが中心となり、本人や家族の経歴や暮らした地域の情報などが不足していることが多い。日記や手紙、体験記・手記といった個人の記録を、継承していく際に常に意識していかねばならない課題だろう。

今回は、この間新たに横浜市史資料室に提供された資料のなかから、いくつかの体験記・手記を紹介する。

### 空襲下家族で避難

まず、空襲の体験記から紹介する。印象的だったのは、戦後七五年の節目である二〇二〇年に、在住のドイツから、コロナ禍の中、郵便が滞っているからと、電子メールで体験手記をお送りいただいたダン・陽子さんである。旧姓森田陽子さんは、当時八歳、太田国民学校二年生で、低学年だったため疎開せず三春台の自宅にいた。

父親は、空襲に備えて自宅に二つの防空壕を造った。一つは家財を入れるため、もう一つは家族が避難するためのものだった。一九四五（昭和二〇）年五月二十九日の朝、庭の花を眺めていると、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り、すさまじい轟音がひびいたという。空をおおうB29の編隊だった。やがて焼夷弾の雨が降り、家が炎に包まれた。火の粉が飛び散って、父が着ていた白いコートに飛び移り、父はあわてて脱ぎ捨てた。

両親と姉弟三人の家族はしばらく自宅の防空壕に退避していたが、父親が危険を感じて、避難所へ向かうことにした。避難所は、坂上の屋敷と坂下の関東学院の二か所だった。自宅の門を出ると、そこに四人家族がいて、自宅の防空壕を使わせて欲しいという。父は危険を承知ならとこれを許した。その四人家族は、防空壕で一酸化炭素中毒で全員亡くなったという。

上の弟は隣人に託し、下の弟を胸に抱り付けて抱いた母と道に出たが、物すごい人混みだった。群衆は坂の上の屋敷に向かい、その流れに押し流されながら、陽子さんたちは人をかき分けて坂を下り、関東学院を目指した。母は家にあつた鍋をヘルメットがわりに頭に被ったが、逃げる途中、炎で熱くなり、額に張り付いて深い火傷となった。その傷跡を残したまま、母は九歳で他界した。

逃げる途中の光景は恐ろしかった。

焼けた家が道に崩れ落ち、飛び退いてこれを避けた。道中どこも、煙と人でごった返していた。やっとの思いでたどり着いた避難所で見たすさまじい光景、その悪夢は一生取り付いて拭えないという。そこには焼死体の山や、逃げる途中の姿のまま焼け死んでいる人々、焼け落ちた荷台の上に座ったまま死んでいる子どもなど、「子供の頭には詰め切れない悪夢」だった。別に逃げていた上の弟も、同じ光景を見て、悪夢に悩まされたという。その後、家族全員再会して、焼け跡の焼死体の脇を歩いて磯子の親戚の家にとどり着いた。

次に、同じく当時八歳だった中川雅子さんの体験記が、ご家族から提供されている（吉村幹子家資料）。戸部警察署の近く（現戸部本町）に自宅があった。両親と姉妹四人の家族で、五月二十九日は父と次姉は出勤し、長姉は何か胸騒ぎを感じて出勤を見合わせていた。そんなときに警戒警報が鳴り、母と姉妹三人は防空壕に退避し、幼い妹のミルクや布団などを家財用の壕に放り込んで土をかぶせた。

防空壕に逃げ込んですぐに空襲警報が鳴り、B29が飛来する音が聞こえた。「ザアッ」と強い雨が降ってきたような音とともに「焼夷弾が落ちてきた。家は火の海となり、皆で布団を被って逃げ出した。石崎川に沿って平沼国民学校まで行くが、軍が使用中の中には入れず、左に折れて西前国民学校にとどり着いた。ところが、ここもいっぱい、



中川雅子さんの体験記

さらに西戸部国民学校まで行き、ようやくそこで一夜を過ごすことができた。

次の日、町内会長の指示で戸部国民学校に移るようになったが、その移動中も遺体をまたいで歩いたり、道路が熱いと妹が泣き出したりと、悲惨な状況だった。そして、戸部国民学校で父とも再会することができたのである。翌朝、姉が自宅の焼け跡を見に行き、壕に入れてあった焼けて黒くなった米をおにぎりにして食べた。その後は、親戚を頼ったり、知人の紹介で富山まで疎開もしたが、九月には横浜に戻りバラックで暮らし始めた。

中川さんの体験記で着目すべきは、避難経路を記した付図があることである。本人と家族で色々と思出ししながらまとめたもので、たくさん書き込みのある下書き図も提供されている。経路上で経験したことや見聞きしたことが、細かく書き込まれている。これもまた、経験した本人にしかできない貴重な証言・記録である。

中村司朗さんは、神奈川区反町の米屋に生まれ、当時四歳半だったという。父は南方に出征中で、祖母と母と叔母



と四人暮らしだった。五月二十九日は、町内会の防空壕から記憶が始まる。その日、叔母は女学校の挺身隊で鶴見の日本鋼管に行っていた。三人で防空壕にいたところ、重くうなるようなエンジン音が聞こえ、その後爆撃の音が絶え間なく続いた。やがて、誰かが防空壕を開いて、「ここは危険だ、逃げる」と言われたが、逡巡して残る人もいた。司朗さん達三人は、壕を出て逃げた。

その途中の記憶は、断片的だという。二ツ谷の交差点で見た光景が印象に残っている。空が太陽がどこにあるかわからないくらい煙で暗く、照明弾のように明るく火のついた焼夷弾がバラバラと落ちてきた。また、国道では市電が燃え、電車の架線が垂れ下がり、あちこちに黒焦げの死体が散乱していた。途中祖母とはぐれ、母と二人で神奈川公園に逃げたが、そこでも火の粉を避けるため公園の噴水池に身を沈めた。

自宅は全焼、防空壕にも火が入ったが、家族は皆無事だった。長野の父の実家近くに疎開したが、それでも鉄道をねらった空襲を目撃し、機銃掃射を受けたこともあった。結局、反町の家には戻らなかつた。

後に家族から聞いた話では、長野に疎開するつもりで、家財は空襲の前に鉄道貨物で送る手配をしたが、駅で留め置かれなかなか発送されなかつた。空襲の一週間前によく貨車に乗ったとのこと。伝聞ではあるが、これも

戦時中の興味深いエピソードである。

### 一人で避難

父親が不在か、あるいは町内の避難・防火などで出かけてしまい、家族とも別れて、子ども一人で避難した体験記も寄せられている。

渋谷光子さんは、子どもたちに語りかける手書きの原稿を三種類残しており、その他ご家族が本人から聞いた内容を加えてまとめた原稿がある。光子さんは二〇二二年三月に永眠され、その直後にご家族からこれらの手記が提供された（渋谷政雄家資料）。

光子さんは当時国民学校六年生、父と井土ヶ谷下町で二人暮らしだった。事情は定かではないが、疎開はせずに自宅にいたところ、五月二十九朝、空襲警報のサイレンが鳴り、父はおそらく町内に避難を呼びかけるためか、出かけてしまい、一人用意のリュックを背負って避難所に向かった。

家が地震のようにぐらぐら揺れ、外に出ると近隣の家はもう燃えていた。防火用水で頭から水をかぶり、逃げ始めたが、上空からB29の編隊の爆音が聞こえ、燃えていない家の軒下で通り過ぎるのを待った。その間も、傷ついたり人たちの悲鳴がたくさん聞こえてきたという。B29が行ってしまってからまた逃げ始めたが、大勢の死骸や、傷ついて血を流している人、顔や手足に火傷をした人が苦しがつてうめいている姿を見た。それでも、歩ける人たちは

歩いて逃げて行った。それは、「生き地獄を見たよう」だったという。

その後、光子さんは、無事に永田の山の防空壕にたどり着いた。そこで警報解除を待ち、解除後に外に出て見た光景は一面の焼け野原だった。

内山尚三さんは当時五歳、両親と兄と四人家族で、自宅は松影町にあった。体験記は、五月二十九日、気持の良い晴天の朝、母と一緒に庭の金魚のいる小さな池を見ていたところから書き起こしている。警報のサイレンが鳴りひびき、急いで防空壕へ逃げたが、大編隊のB29に父はこれは危ないと、「いつもの山のお寺へ」先に逃げろと言った。尚三さんは一人、中村川を越え山元町の橋を渡ろうとしたが前方に爆弾が落ちて進むことができず、橋のたもとでじっとしていた。

結局、橋のたもとで一晩過ごし、翌日自宅まで戻るが、家は跡形もなく、水道管だけが残っていて、水がチョロチョロ出ていた。その水を飲んで、また橋のたもとに戻り、座り続けていた。さらに翌日、知らない人にお寺まで連れて行ってもらい、そこで兄と再会した。兄は、爆弾（焼夷弾）で足を負傷して歩けない状態だった。兄は生涯、足に障害が残ったという。

同じ松影町の鈴木健治郎さんの日記によれば、山手の蓮光寺を避難所としていたというので、この山の寺は蓮光寺、山元町の橋は山手の丘をつなぐ打越橋のことと思われる。

先の中村司朗さんや内山さんのように、当時四、五歳と年少の方々は、幼い当時の記憶は断片的だが、その断片が鮮烈な記憶となり、体験記にも記録されている。内山さんにとっては、朝の庭の池の光景と、打越橋のたもとで二晩も過ごしたことが強烈に印象に残っているようで、体験記を提供していただく際には、自ら撮影した打越橋の写真を見せながら説明していただいた。一人、心細く橋のたもとに座り続けていた心情は、察するに余りある。

### 軍施設の記憶

岩本昭二さんは、やはり当時五歳、自宅は子安台にあった。岩本さんの場合は、体験記というより、子安台にあった高射砲陣地を巡る戦中・戦後についての手記である。五月二十九日は警報のサイレンでリュックを背負って防空壕に逃げた。すき間から外を見ると、横浜の空は炎に照らされ、子安台の陣地から照明弾が実弾かわからないが、花火のように次々と打ち上げられるのを見た。これが、子安台での最初で最後の目撃だったという。

昭二さんの手記では、戦後のエピソードが興味深い。子安台の高射砲陣地も米軍に接収され、米兵達が暇つぶしに毎日のようにビール缶をねらって銃を撃っていた。地元では、恐ろしくて生きた心地がしないと米軍と交渉することになり、フェリス女学校出身の母であれば、英語も通じるだろうと交渉役



岩本昭二さんが描いた戦時中の子安台周辺の様子

年のことだった。田奈部隊とは、正式には陸軍東京兵器補給廠田奈部隊とい、弾丸等の製造（填薬）を行い、弾薬倉庫もあった。この年に強化された学徒戦時動員によって、期間限定の勤労奉仕に動員されたのだろう。

翌年女子商業を卒業した郁子さんは、おそらく学校単位で組織された女子勤労挺身隊の一員として、再び田奈部隊に派遣される。通年勤務で給料も出た。郁子さんは、医務班に配属された。医務室の隣には、食堂と売店があり、食料は豊富だったという。しかし、軍の施設だけにすべてが軍隊式で、服装はカーキ色の上着とズボン、将校に対しては軍隊式の敬礼、入室の際にも軍隊式の申告が必要だった。

動員学徒に関する悲劇にも遭遇している。一九四四年一月のトラック事故の際には、後続のバスに乗車していた。駅から勤労動員の横浜第二中学校生徒を荷台に乗せていたトラックが川に転落し、六人が亡くなった。医務室で、軍医が遺体の処置など行うのも目撃した。トラックを運転していた徴用工が、愕然として涙ぐみながら「早く戦場に行つて死にたい」と言っていたという。印象的な場面である。

また、翌年二月に起きた爆発事故では、爆音に驚いて飛び出し、爆発直後の光景を目撃した。地雷を貨車に積み込む作業中に起きた事故で、荷車の作業員六人が馬ごと「木っ端微塵に吹き飛ばされ」、道路に大きな穴が空いてい

た。たまたま食事当番のため、通りがかった神奈川高等女学校の生徒も巻き込まれ、四人が負傷した。

五月二九日は、泊まり番で田奈部隊にいた。空襲が始まってから、軍のトラックで東神奈川駅まで送ってもらい、自宅に向かったが、一面の焼け野原でどこがどこかわからない状態だった。その内、近所の人と出会い、家族の無事を聞いた。被災後は、家族は知人を頼り、郁子さんは田奈部隊の女子寮に避難した。その後、家族は六角橋の知人が引っ越した後の家に移った。

郁子さんは、戦後日本生命にいったん就職したが、しばらくして田奈部隊で弾薬処理を行っていたという会社から突然連絡があった。短期間ながら、給料が男性の二倍程ととても高く、説得されて再び田奈部隊に務めることになった。経理の仕事だった。

戦後すぐに、田奈部隊は米軍に接收されるが、弾薬等を処理する必要がある。それを民間の会社が請け負っていた。軍施設や軍需工場では、兵器処理や賠償のため、占領軍の許可を得て、一定の期間民間会社が作業を行った。田奈部隊では業者が、弾丸を処理し、薬莖に使われていた真鍮の私下を受けて加工していたようだ。郁子さんの証言は、当事者のものとして貴重である。

郁子さんは、兵器処理の仕事が一段落して一九四七年に結婚する。その相手の実家土志田家は長津田にあり、また長津田に戻り、今に至っている。ご

本人も、「運命なのか」「長津田の地に何度も引き寄せられた」と語っている。

### 出征兵士の従軍記

最後に、出征兵士の手記を紹介したい。鉄道部隊で、インパール作戦に参加した加山昇市さんが、復員後一九四七年八月に書いた従軍記である（加山昇市家資料）。「従軍思ひ出の記」と題し、日々の出来事が詳細に記され、手書きの現地の図面もある。

なお、昇市さんの出征にあたり、父親の三郎さんがその前後の出来事を記した「昇市出征覚」が残されている。それによると、徴兵検査は若干体格が不足して第二乙種合格、補充兵役で、父母、本人共に失望したとある。それだけに、一九四三年五月二六日、応召を聞いて、「神前に仏前に灯をあげて喜びのうちに御報告をすま」したという。さらに、「鎌倉八幡、片瀬龍口寺へ武運長久祈願に行」った。その後もあいさつ回りや寺社参拝が続く。

二九日には、「親子水いらずの映画見物」にだけ、日本劇場で「海ゆかば」と大相撲記録映画を見て、「健全娯楽のためのしんだ」。その夜は壮行会で、物資不足の中牛肉を手配した。友人や親類一二人が集まり、「心置き無き壮行会が出来た」という。

翌三〇日は、まず先祖の墓参を済ませ、あいさつ回り、洲崎神社・伊勢山皇大神宮などのお参りをし、町内の壮行会だった。六月一日はいよいよ出発の

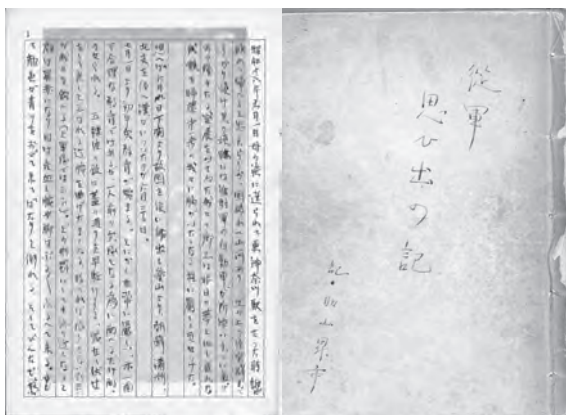
を任された。着物の母は昭二さん連れて、司令官と面会し、今後銃は撃たせないと約束を得たのである。なお、昭二さんからは、高射砲陣地の配置や防空壕の位置など、当時の子安台周辺の様子を画いた図を提供していただいております。これも貴重な記録である。

このように、戦中・戦後の特定の施設に関する証言は、資料や記録が残されていないだけに貴重である。土志田郁子さんは、田奈部隊の戦中・戦後にについてご家族がインタビューするかたちで証言をまとめ、ご提供いただいた（土志田三津夫家資料）。郁子さんは一九二七年生まれ、東神奈川に自宅があり、当時横浜女子商業学校の生徒だった。郁子さんが、初めて長津田駅に降り立ち、田奈部隊に入ったのは、一九四三



日、母は二時起きで赤飯を炊き、早朝四時、千葉へ出発した。校長先生が見送ってくれ、家族・親類は東神奈川駅まで送った。父親は千葉まで同乗したようだ。六時千葉着、八時に入隊した。父親は、私物を持ち帰るため二時間待ち、軍装りらしい昇市と五分面会して帰った。召集からの経緯を記した記録は珍しく、大変貴重である。

一方、昇市さんの従軍記は、戦後復員後早い段階で書かれており、記憶も生々しく、非常に臨場感溢れる記述が続く。昇市さんは、一九二二年青木町に生まれる。神奈川工業学校建築科を卒業して、日立航空機製造千葉工場に勤め、寮暮らしだった。召集されて、一九四三年六月一日、千葉の東部第八六部隊（鉄道第一連隊）に入隊した。すぐに千葉を出発し、下関・釜山から満州・北支を経由して二二日に漢口に入っ



た。この頃には、未教育新兵も戦地で新兵教育を行う例が多かった。昇市さんも七月一日から新兵教育に入り、三か月の厳しい教育訓練を受けた。

その後、一月に転進の命が下った。行先を知らされないまま上海の港を出港、台湾高雄に到着したが、そこで昇市さんを含めた下痢患者は下船させられ、回復後本隊を追うことになった。昇

市さんたちは、仏印サンジャックに入り、サイゴンに向かい、さらにプノンペンを経て、年明け二日にバンコクに到着したが、本隊はラングーンに向かったとのことでこれを追った。一月六日、ようやくインセン（インセンカ）の本隊に合流できた。線路敷設や土木作業、さらに測量などに従事した。

この間、南国ならではの風物、果物や料理のこと、また知り合ったビルマ人のことなどが記されている。三月一日、北緬ミチナ線への転進が発令された。インパール作戦の輸送路確保のためだったという。ここで、昇市さんもインパール作戦に参加することになったのである。大量の鉄道資材を貨車に



加山昇市さんの従軍記と出征時の記念写真

積んでの移動だった。合い間には、付近の哨戒・警備についた。

四月二三日のことだった、敵と遭遇し、地雷の爆発で小隊長は戦死、その破片と銃撃で腕や胸を負傷した。野戦病院に入院したが、その時の破片は生涯体内に残ったままだった。五月一日には退院し、中隊に戻った。

その後も、前進を強行したが、次第に戦況は厳しくなり、迫撃砲の至近弾を受けて死傷者も出た。次第に、前線から傷病兵が後退してくるのにも出会うようになり、戦闘機の銃爆撃も激しかった。日本の飛行機の援護はなかったと

いう。七月には、昇市さんはマラリアにかかるが、ろくに治療も受けられず、橋梁建設などの作業を続けた。しかし、橋は架けては落とされといった状況で、雨中の悪戦苦闘が続いた。

前線からは、餓えて病んだ兵士たちが後退してきて、「残飯はありませんか」という。隊でも死者、傷病者が増えてきて、ようやく作戦打切が伝えられ、転進という名の退却が始まった。その様子はよく覚えていないという。戦友に背負われて、明妙（メイミョー）の野戦（兵站）病院に入院したのは一〇月に入ってからのことだった。明妙は、イギリス植民地時代からの高原の避暑地で快適だった。

翌一九四五年二月二日にタイ国へ転進を命ぜられて、明妙を出発した。その転進の途中、工場の機械や鉄道器材の撤収を命ぜられたが、機関車が確

保できず、貨車の移動を断念、機材を破壊して、徒歩での退却となった。

一か月後、ラングーンを過ぎインセンに戻ったが、ここでも鉄道工場の機材を撤去しタイへ輸送せよと命令を受けた。一週間程作業を続けたが、危険が迫り、作業中止、タイバンコクへの転進が命じられた。インセンからは軽列車で出発したが、途中橋梁が破壊されていて、渡河を断念し、再び機材を焼却して、ようやく五月二六日にバンコクの宿舎に到着した。

その後バクナムポウで勤務についていたが、八月一五日のポツダム宣言受諾と武装解除が正式に伝えられた。そして、一年以上の捕虜生活を経て復員する。翌年一〇月バンコクからメナム川を下り、日本軍生き残りの空母葛城に乗船、二五日に出発した。一月三日に浦賀入港、翌日上陸、検査や書類の整理に二日、六日ようやく焼け跡の中の六角橋の自宅にたどり着いた。

鉄道部隊という後方部隊でありながらも、戦場の厳しさがひしひしと伝わってくる従軍記といえる。また、退却中に無理な機材の確保を命じるなど、軍の混乱ぶりがうかがえる貴重な証言でもある。

空襲の体験記とあわせ、横浜市民の戦争体験の記録として、こうした兵士の戦場体験も、横浜の歴史の中に位置づけていかなければならない。

（羽田 博昭）

所蔵資料紹介  
「FASHION in the 1946-1954」

紹介する資料は、澁谷英行が描いたドローイングや新聞・雑誌の切り抜きを集めたものである。澁谷は一九四九（昭和二四）年にボングー洋装店を中区本郷町に創業し、一九九五（平成七）年に亡くなるまで婦人服のデザイン・製造・販売に従事した。

澁谷は、戦後間もない一九四六（昭和二一）年頃から、駐留する米軍住宅から入手した新聞や広告で、最新のファッション情報を得て、ドローイング（線画）を描いた。そして、それらのデザインを参考に洋服を製作し、ファッションショーで発表するようになった。

「デザイン集」は、五冊残されている。戦後の用紙に描いたので、痛みが激しく、澁谷は一九八六（昭和六一）年から一九八八（昭和六三）年頃、五冊のスケッチブックに貼り付けて整理した。当時の欧米ファッションを知ることができる、貴重な資料である。内容は次の通りである。

①「FASHION in the 1947」 Vol.1



「FASHION in the 1947」 Vol.1より  
横浜市史資料室所蔵  
ボングー洋装店資料

- No.1-No.77（通し番号。以下同様）
- ②「FASHION in the 1946-1947」 Vol.2  
No.78-No.163  
欠：No.152・No.153・No.158・No.159  
No.164-No.207
- ③「FASHION in the 1946-1951」 Vol.3  
欠：No.166・No.167・No.172-No.174・No.192
- ④「FASHION in the 1951-1954」 Vol.4  
No.208-No.248
- ⑤「FASHION in the 1946-1947」 Vol.5  
澁谷は整理した際に、「第1集について、1947年春にニューヨークタイムズ誌からコピーしたもので、当時のアメリカンファッションを知る良い資料である」。1930年代ファッションの部分的修正や繰り返しなどがなされていたことがよくわかり、やがて巴里で同じ時期にクリスチャン・ディオールがニュー・ルック旋風を起して世界のファッションをリードして行くことになるのだが、その直前のものとして面白く見られると思う」と書いた。
- 第3集では、「ようやく世界各国にファッションに対する意識の高まりが現れて来た」。「アメリカンファッションとパリモードの当時の最先端が収録されている。デザインがますます大胆に、そしてデリカシーになって来ているのがよく分る」と書いている。
- この度、全冊の複製（A4判）を作成した。閲覧室でご覧いただきました。

（上田 由美）

《市史資料室たより》

【令和5年度横浜市史資料室展示会】  
シリーズ展示 横浜の女性と洋装

◆「スマートな洋装」-横浜のモダンガール  
11/18~11/30 \*終了しました。

◆戦中・戦後の横浜の女性とファッション  
会 期：12月13日(水)~12月23日(土)

◆洋裁ブームと横浜の洋装店  
会 期：1月20日(土)~1月31日(水)  
\*女性たちが洋装を取り入れていく姿をシリーズ(3回)で紹介します。

時 間：午前9時30分~午後5時

◎入場無料

会 場：横浜市西区老松町1番地  
横浜市中央図書館地下1階  
ホールおよび横浜市史資料室  
休室日：毎週日曜日及び横浜市中央図書館休館日  
(12/11、12/25~1/14)

【展示関連講座】

ハマのモダンガール-震災復興と戦争のはざま  
11/23 \*終了しました。

講 師：羽田博昭  
(横浜市史資料室主任調査研究員)

【展示解説】

◎申込不要、無料  
12月16日(土)午後2時~3時

【展示講演会】

山手の服飾文化を支えた「ボングー洋装店」

◎定員150人 申込不要、先着順、無料  
令和6年1月27日(土)

午後2時~4時(開場1時30分)

講 師：多根雄一

(杉田劇場 地域文化コーディネーター)

\*講演会で手話通訳を希望される場合は、  
1/12(金)までに当室へご連絡ください。

◎展示解説、展示講演会

会 場：横浜市中央図書館地下1階ホール  
\*展示会終了後に、内容を撮影した動画を配信する予定です。

【寄贈資料】

- |                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| 1 高橋富美子様<br>高橋富美子家資料追加           | 3件  |
| 2 戸田淑子様<br>横浜市磯子尋常高等小学校卒業記念アルバム他 | 6件  |
| 3 白石 緑様<br>白石緑家資料追加              | 23件 |
| 4 田村千尋様<br>田村明資料追加               | 29件 |
| 5 澤田由香様<br>「大正十二年九月一日大震災記念写真帖」   | 1件  |
| 6 内山尚三様<br>横浜大空襲体験記              | 1件  |
| 7 加山 修様<br>スクラップブック他             | 13件 |

【資料提供のお願い】

当資料室では昭和期の横浜に関する国内外の資料の収集・保存・調査研究および公開を行っています。昔の街並みや行事の写真、古い絵はがき、パンフレット、ポスターなど横浜を記録した資料をお持ちの方はぜひご連絡ください。次世代の市民に引き継ぎます。

【横浜市史資料室のご利用について】

横浜市史資料室は、取り寄せが必要な資料が多いため「事前予約の方優先」によるサービスの利用を案内しております。事前に電話、eメール等で利用方法等をご相談ください。

予約なしで来室された場合、閲覧を希望される資料によっては取り寄せの関係から別日にご案内する場合がありますのでご了承ください。ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

【横浜市史資料室】

横浜市西区老松町1 横浜市中央図書館地下1階  
開室時間：午前9時30分~午後5時

入室無料

休 室 日：毎週日曜日及び中央図書館休館日

Tel：045-251-3260

Fax：045-251-7321

Eメール：sisiryou@ml.city.yokohama.jp